石井武夫先生退官記念展作品集について

絹谷幸二

画家にとって作品を展示し、個展や展覧会を開催することは一大事業といえる。衆人の視線をじかに受け、多くの人々から讃辞を受けることもあれば、辛口の批評にさらされることもある。いずれの場合もそれらの意見を糧に再び次の絵画制作に気を引きしめて描き続けることになる。しかしここで展覧会や催事は期間がかぎられ、一過性の出来事であり、その展示の印象は時間と共に忘れさられてゆく運命にある。作品集がいかに大切なものであるかはここに由来する。

作者が描いた渾身の作品も時間と共に時空を飛行し、それぞれがまだ会ったこともない未来の子供達と語り続けられるが、それらの絵が一カ所の特別の美術館などにおさめられたらそれは幸運だが、たいがいの場合、方々に散逸する。作者の想いは集められ、一つのコンセプトを年代をこえて主張することはもはや不可能に近い。

作品集は画集というたなごごろに入る大きさに集約され、その時の作者の軌跡、正に1957～2010と銘打たれた石井武夫の生きざまを見せる手鏡となる。

大阪芸術大学美術学科の学科長として長年芸大で学生を指導するかたわら、描き続けた近作から、1957年仔牛の絵、’60年の20才の自画像に至るまでの全貌を手近でかいま見ることが出来得る。

この作品集は作家石井武夫の全てを知る上で今後とも大切な資料として、後世につたえ得る珠玉の作品集だと思う。

石井武夫作品集『Works of TAKEO ISHII 軌跡―1957～2010』（生活の友社）は堅牢な厚紙表紙で正方形の装丁をととのえている。巻頭文をブリヂストン美術館館長で美術評論家の富山秀男氏が執筆している。

「旧知の洋画家石井武夫（1940～）が、こんど70才で一切の教職を退くのを契機に、画集を作ることにしたとのことでそれに載せるための一文を乞われた。」という文面で切り出され、「“石井武夫＝ダミーの画家”という印象がすべてを制し、この画家の歩み、その思想を制作の展開もこの一点に絞られて、その画家像が浮上してくる」と述べている。「『ダミー』（Dummy）とは物を言わぬ人型（ひとがた）のモデル人形であり、マネキンのことである。それが今日ではロボット時代に先駆けて人間の機能を持つ精密機械を内蔵させられ、自動車に積まれたりして激しい衝突事故などの際の実験データをとるのに使われだしたのだ。いや自動車だけに限らない。あらゆる人間生命の極限状態を演ずる替え玉的身替わり品なのである。当然大きな関節部分ははずれるように出来ているし、頭部には耳のあたり、小脳部分に標識がついているのも大きな意味があるのだろう。」

富山が評しているこの石井のダミーにたくして描き出す心情は多かれ少なかれ現代人が共通に持つ不安感や焦燥感を機せずして同時代人として石井は体感しその思いのたけを鏡に映し出す様に画面に表現しているのだ。（1976年）

1974年の「室内」では女の後に立つマヌカンにすぎなかった人形のはり子が1975年の日曜日の朝のダミーとなり、背後の自然や都市の風景と手前の暗い影の中にあるダミーが出現し、1976年安井賞展佳作賞にかがやいたDummyに収斂していく。そしてそれ以後石井はこのテーマを深く追いもとめて行くことになる。画集は年代を追ってこの軌跡をあますところなく表出してゆくことになる。

石井武夫の一生涯に於けるダミーというテーマは、長女彩子さんが悪性脳腫瘍で生後5年あまりでこの世を去ったという石井にとって痛恨の悲劇に起因している。幼き彩子さんが

いわれなき病にとりつかれ、その生命をうばわれる刹那、彼女を救いたい、助けたいという想いが病院での三回の大手術を施されて管やチューブを装着された寝姿となり、ダミーを連想させたのかもしれない。そして又、出来ればダミーに我が子の変わりに身がわりになって変わってほしいという、切なる父親の気持ちが期せずして画面に表現され定着していたのだろう。

その想いは彼女の旅立った後も消えるどころか益々つのり、彼の一生涯の仕事として、画家石井武夫の源動力となって続いてゆく。

1978年紀伊国屋画廊での第8回シリーズ展石井武夫個展〈人間とは何か〉によせて故坂崎乙郎は以下の様に述べている。

何かが起こったに違いない、このダミーたちのあいだでは、外的圧力ないしは内部崩壊？

束の間のマネキン人形を思わせるダミーたちをよく見ると、かれらの崩壊はすべて頭部からはじまっている。しかも、耳のあたりにはきまって二つの銃眼がうがたれている。ダミーは人形ではない、生命体なのだ。

そして、この生命体への画家の感受性はモーダーゾーン＝ベッカーのことばそのままに鋭く磨ぎすまされている。

「胎児が発育する最初の段階では、心臓が頭部に位置しており、やがてだんだんと胸におりてくるというのだ。あたまのところがお隣同士にうまれあわせたなんて、なんと素晴らしいんだろう」

石井さんは第4回個展のカタログでこう書いている。「破壊される一瞬のために造られるダミーに惹かれ」て、と。

制作とはつねに破壊を予感している。美とは一瞬美しいと感ずる魂の状態で、不在である。画家はこの不在に賭けることによって、かりそめの存在をいっさい無にすることを、彼は識っているのである。

（紀伊国屋画廊第8回シリーズ展〈人間とは何か〉1978年より）

この様に形而上絵画の大家、イタリアの二十世紀の巨匠、デ・キリコを彷彿とさせる石井の立ち位置は、この画集以後も「彼が筆を止めるまで」、今後とも独自の発展をとげるに違いない。事実、2003年作「アトリエの朝」ではくずれゆくダミーの群像の中に生身の裸婦がすっくりと起立する。窓辺からさす朝の光に人体の皮膚は生々と輝き、生きてある喜びと生気が画面を支配する。以後、夕暮れの謎、2004年孤独の響宴、2008年夏の……と　2009年秋など自身の自画像もまじり出して来る。この頃から石井に何か変化が生まれたのだろうか。ダミーの背には天使の羽根とも思われるつばさも現れいまは亡き愛する娘彩子へのオマージュが又、異なった形で出現する。もしや彼女が生きていたら……このモデルの年令なのでは……。

絵画は作者の心の中を写す鏡なのだろうか。本人が気がついていようがいまいが、意識下で芽生える深い深層の淵がかいま見える様だ。そして又、異なった見方をすれば年令を重ね、長年、ダミーにとりつかれた自身の重い心の負担をこの若き顔の女に助けを請いたいのか……。

生と死、存在と不在の間隙でゆれ動き描き続ける石井は今、この生々とした若いモデルに気をうばわれたいのではなかろうか。

こよなく赤色のブドー酒を愛する石井ははじめて酔いという境地を掴みかけたのではないだろうか。長年筑波大学・大阪芸術大学と後進の指導にあたりながら制作活動を続けて来たが70歳（古希）を迎え、いよいよ作家一本の画境に入って来たといえる。

今後の活躍を期待すると共に今の度の集大成の作品群の上に、次なる画集にどの様な足跡が積み重なっていくのか楽しみでもあり、

石井武夫の今後の仕事に注目せざるを得ない所だ。

室内，油彩･カンヴァス　1974年

アトリエの朝，アクリル･油彩･カンヴァス　2003年

2009年・秋，アクリル・油彩・カンヴァス　2009年

石井武夫作品集（生活の友社、2010年11月刊）